

2023 年度 特待入試
第 2 回

国 語

[注意事項]

- 1 問題は一から四までです。
- 2 時間は 50 分です。
- 3 下敷きおよび電算機つきの時計の使用を禁止します。
- 4 解答は、濃くはっきりと書くようにして下さい。
- 5 開始の合図があるまで問題用紙を開かず、手を触れないで下さい。
- 6 試験中はよそ見をせず、きちんとした態度で行って下さい。
- 7 何か物を落としたら、黙って手をあげて下さい。
- 8 他の受験生に迷惑となるような行為をしないで下さい。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

わたしたちが言葉で何かを表現しようとするとき、それが出来合いのことば（ここでは、言語としての「言葉」に対し、一つひとつの語という意味で「ことば」とひらがなで書きます）ではうまく表現できないということがしばしばあります。あじさいはわたしの好きな花の一つですが、雨に濡れたあじさいはとくに美しく感じられます。その花の独特の色合いや雨を含んでいっそう緑が濃くなった葉の美しさを誰か他の人に——雨のなかに咲くあじさいの花を見たことがない人に——ことばで伝えようとして、それがいかに困難か、いや、ほとんど不可能であることに気づかされます。それでも、それをあえて表現しようとするとき、わたしたちはわたしたちがもっている既存のことばを使わざるをえませんが、そこに何とか新しい意味を込めて、自分が見たり、感じたりしたものを言い表そうとします。①
そうした方法を使ってわたしたちは、無限な広がりをもつ「意味」に対応しようとしています。むずかしい試みですが、決してその可能性がないわけではないと思っています。（中略）

たとえばわたしたちは自分の気持ちを「はればれとした」とか「うきうきした」といったことばで言い表したり、お茶の味を「まろやかな」とか、「うまみがある」といったことばで表現したりします。しかしそのような表現で、自分の実際の感情や、お茶の味を十分に言い表すことができません。しかし「まろやかな」という表現を、「味が穏やかで口あたりがよい、そして深い味わいが感じられる」といった言葉で説明することはできます。しかしその「深い味わい」がどのような味わいなのかをさらに説明しようすると、言葉に窮することになります。

言葉は、たしかに、わたしたちが経験するものの一面を言い表し、他の人に伝えます。しかしそれはわたしたちが実際に経験していることの一部でしかありません。言葉による表現は、経験の具体的な内容がある断面で切り、その一断面で経験全体を代表させることに喩えられるかもしれません。その一断面からあらためて経験の全体を眺めたとき、両者のあいだに大きな隔たりがあります。②
そのあいだには無限な距離があると言ってもよいでしょう。

「言葉」の語源は、「言の端」であったと言われます。古くは「事」と「言」とは通じるものと考えられていました（言葉には、そのなかで言われているものを具体化する霊的な力が宿っているという、いわゆる言霊思想はそこから生まれたものでした）。しかしやがて「事」と「言」とは同じではないということに人々は気づくようになりました。言葉は「事＝言」として事柄全体を言い表したものではありません、そのほんの一端を言い表したものにすぎないということが意識されるようになったのです。そのために「言の端」という言い方がされるようになったのだと考えられています。（中略）

*
よくみれば齊花さく垣ねかな

齊というのは、「せり、なすな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ……」と言われる春の七草の一つです。ペンペン草という別名をもつ、雑草の代表のような草です。それを振ると実がペンペンと音を立てるので、子どもが遊びに使いますが、しかし、その花は実に地味な小さい白い花で、ほとんど注意されることはありません。

せん。その花に芭蕉は目を留め、その地味な花がもつ美しさに動かされていることがこの句からわかります。

「よくみれば」というのは、ただ単に「よく観察すれば」という意味ではありません。日常の生活の延長上で、より精確に観察された事態がここで詠われているではありません。③ 日常のものを見る目、ものを見る立場というものを超えたところに開かれてくる世界が詠われていると言えらると思います。

ふだん、わたしたちは生活のためにけんめいに働いています。必死で働いているとき、なぜそのような地味な花の美しさが目に入ってくることはありません。活のためにという枠が外れたときにはじめて、何の役にも立たない、少しも注意を引かない、ごくごく小さいもののなかにある美が目に入ってきます。そこでは、ものを見る目が変わり、世界の経験のされ方が変わっていると書いてもよいかもしれません。芭蕉はその世界を、そしてその世界のなかに見いだされる美を詠ったのです。

この句を読んだとき、わたしたちはそれまではずなの花の美しさに感動した経験がなくても、芭蕉が言おうとすることを理解することができます。芭蕉とともに「よくみれば薺花さく垣ねかな」ということばの背後にある④「こと」の世界へと、つまり芭蕉が経験している美の世界へと引き入れられていきます。

この句もそうですが、詩歌は特別なことばを用いるわけではありません。詩歌が用いる一つひとつのことばは、わたしたちが日常の会話のなかで使っているのと同じものです。日常の事物を言い表すことばを使いながら、詩歌は、このことばの背後に、日常の世界を超えた世界をくり広げていく力をもっているのです。とくに俳句や短歌はごくわずかのことばしか使いませんが、それを読む人のうちに、かぎりない「こと」を喚び起こし、無限に大きな「こと」の世界を切り開いていきます。詩歌を読む人は、一つひとつのことばを読みながら、それを踏みこえてこの無限の「こと」の世界のなかに参入していくのです。それを可能にするところに詩歌の力が、広く言えば言葉の力があると云えます。

藤田正勝『はじめての哲学』より

* 既存……もうすでにあること。

* 窮する……困る。

* よくみれば薺花さく垣ねかな……江戸時代の俳人である松尾芭蕉の俳句。「垣ね」は垣根。

* 詩歌……俳句・和歌・詩などのこと。

問一——部①「そうした方法」とはどんな方法ですか。文中の言葉を用いて説明しなさい。

問二——部②「そのあいだには無限な距離がある」ことを、文中で挙げられているお茶の味の例に当てはめて述べたものとして、最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア「まろやかな」とか「うまみがある」といったことばによって、自分が実際に味わったお茶の味を、完全に言い表すことができているということ。

イ「自分が実際に味わったお茶の味を言い表すためには、「まろやかな」とか「うまみがある」といったことばよりも、よいことばがあるということ。

ウ「まろやかな」とか「うまみがある」といったことばが言い表すことと、自分が実際に味わったお茶の味そのものは、大きく異なるということ。

エ「自分が実際に味わったお茶の味を言い表そうとすると、「まろやかな」「うまみがある」のほかにも無数のことばが必要になってしまうということ。

問三——部③「日常を見る目、ものを見る立場」とほぼ同じ意味で用いられている表現を、これより後の文中から十字できがし、抜き出して答えなさい。

問四——部④「こと」が表すのとは明らかに異なる内容を表している文中の表現を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア「意味」　イ「事」　ウ「言の端」　エ「事柄全体」

問五——部「決してその可能性がないわけではないと思っています」について、筆者はなぜそう思うのでしょうか。「こと」という語を使わないで説明しなさい。

問六——経験した事柄や自分の気持ちを他の人に言葉で適切に伝えるために、あなたはどんな勉強をしていきたいと思いませんか。本文の内容をふまえて理由とともに書きなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

春が近づくと「桜前線」が日本列島を北上していくことで春の訪れを思い、晩秋になると今度は「紅葉前線」が日本列島を南下していくことで冬の訪れを実感しています。日本列島がほぼ南北方向に並んでいるために、気温の上昇が南から北へ、気温の下降が北から南へと進んでいくことを、桜と紅葉で代表させていると言えるでしょう。

この研究で取り上げるのは、例えば桜が開花する日がどれくらい早くなったか、紅葉が始まる日がどれくらい遅くなったかで、地球の温暖化がどれくらい進んでいるかを調べようというものです。実は、桜前線は300年以上前から暦などに書かれてきましたから、300年の間の開花の記録があります。桜や紅葉だけでなく、さらに昔からのいろんな記録を使って、野生の動植物が地球の気温変化にどう反応したかを調べれば、地球が温暖化している証拠が得られるのではないかと、と期待できるでしょう。これを「地球温暖化のフィンガープリント（指紋）」と言います。①自然が何気なく残した「指紋」を読み取れば、過去の地球環境の変化を探れるだろう、というアイデアです。

A 比較的温度が低い場所を好むクマゼミが、日本列島を北上していることを知っていますか？ クマゼミは、最初九州や沖縄の島々に生息していたのですが、少しずつ北上を続けて1980年代に関西の都市部で見られるようになり、1990年代には中部地方、2000年代には神奈川や東京にまで広がってきたことが報告されています。クマゼミの生息地が北上しているのは確かなのです。実際にこのことを具体的に確かめようと、大阪や京都の博物館が呼びかけて子どもたちの協力を得て、いつクマゼミが鳴き始めたか、その数はどう変わったか、都市部と山間部でどんな違いがあるか、などの観察が10年以上にわたって続けられました。その結果、クマゼミが鳴き出す時期は早くなり、関西での全体の数は減っており、都市部から山間部へと移動していることがわかってきました。クマゼミは気温が高くなった場所から、比較的低温の場所へと移動しているようなのです。

あるいは、低温を好むツクツクボウシが鳴く時期が、8月末頃であったのが、9月に入って鳴くようになり、そのうちに9月末になってやっと鳴き始めたというふうに、暑い時期が長引くのでツクツクボウシが姿を見せる時期が遅くなっていることも観察されています。その他のさまざまな昆虫（コオロギ、スズムシ、ホタル、カブトムシ、トンボなど）の分布の変化も併せて調べれば、もっと地球温暖化の証拠が示せるのではないのでしょうか。

野生植物でいえば、高山植物がどの程度山の高い場所へと移動しているかが調べられています。植物は自分では動くことはできませんが、生える場所は移動できるのです。というのは、野生植物は花が受精すると周辺部に花粉を振り撒くだけでなく、虫にくっついたり、風に吹かれたり、獣の毛にくっついたり、鳥に食べられ遠くまで運ばれたり、というような方法で次の世代の子孫である花粉を広い場所に散らばらせているからです。そして、その土地が植物の好む温度や湿度であれば発芽して花を咲かせ、温度が高くて成育に好ましくなければ発芽しないままとなりますから、植物も生育の条件が良い土地に移動すると言えますね。寒いところを好む高山植物も地球温暖化のために、より気温が低い場所、つまりより高い場所へと「登る」わけです。

B

このようなさざまな記録を世界各地から集約して、実際に地球温暖化が野生の動植物の分布にどのような影響を与えているかを調べた研究があります。指紋を調べて犯人の挙動を推理するのに似て、長年の動植物の動きを指紋と同じように読み取り、地球温暖化がどのような痕跡を自然に与えてきたかを探ろうというわけ
です。

③ 私は、この研究をとても高く評価しています。C、いろいろな地域で動植物の地道な観察が行われ、それを何年にもわたって続けられていることに敬意を表したいと思います。さらに、その報告を数多くの文献から探し出して整理し、地球温暖化のフィンガープリントとして歴史を読み取る研究者の粘り強さにも脱帽しています。実際のデータは採集者ごとに矛盾していたり、地域ごとの差があったりする上、年ごとの変化はジグザグで一辺倒ではないし、不十分なデータを補わねばならない、というように実に注意深い研究が必要であるからです。

そして1500種くらいの動植物のデータを集約して、この10年間に、野生の生物は約6km北上し、高山植物は6m高く登り、鳥が卵を孵化し、桜の花が開花するのが2・3日早くなったという結果が報告されています。「たったそれだけの変化なの？」と思われるかもしれませんが、このような変化が100年続くとすれば、この結果を10倍しなければなりません。実際には地球温暖化は加速され、どんどん進み方が速くなっていますから、50年でこの10倍になり、100年先には50倍になっているかもしれません。重要なことは、はっきりと地球温暖化のフィンガープリントが読み取れるようになったということです。地球の生物の分布に大きな変化が生じるようになっていると言えるのです。

この研究の予言が証明されつつあることを述べておきましょう。春先になると①植物の若葉が広がり、②昆虫の幼虫(毛虫)が蠢き始め、③鳥が卵をかえしてヒナの養育を開始します。実は、自然界がこの①―②―③の順序で春を迎えるということが、野生の生物にとってとても重要なことなのです。昆虫の毛虫は柔らかい葉っぱしか食べられませんから、幼虫が蠢き始める頃には植物に新緑が芽を出していなければなりません。また、鳥はかえったばかりの幼いヒナに毛虫を餌として与えますから、鳥が孵化してヒナとなるころには毛虫が蠢き始めていなければなりません。このように、植物の新緑の葉―毛虫―ヒナが、ほぼ同じ頃に順序を違えずに育っている必要があります、その順序が狂うと野生生物が死に絶えることになりかねないのです。

④

実際に、最近のヨーロッパの研究で、毛虫が育つのが早すぎて、まだヒナが育つ前に毛虫がいなくなり、マダラヒタキのヒナが腹を空かせていて危機的状況である、ということが報告されています。マダラヒタキは、春先にアフリカから渡ってくる鳥で、ヨーロッパの温暖化が進んでいることを知らないままやって来て、毛

虫がいなくなっているという困難に陥おちいっているようなのです。

海の魚の分布を調べた研究もあります。北海に潜もぐって、どのような魚種が多く泳いでいるかを、地域ごとの分布を調べたものです。その結果、この30年の間にタラとかシャケ（サケ）とかの比較的低温を好む魚の分布の中心が、北に200kmも移動していることがわかってきました。海水温はいったん上がるとなかなか冷えず、地球温暖化の効果が持続して累積るいせきしていきますから、分布する魚種の変化が明確にわかるのです。北極海の温暖化が進むとタラやシャケの行き所がなくなってしまうでしょう。

D 海水温が高すぎて生息できる場所がなくなり、死に絶えることになるかもしれません。

以上が地球温暖化のフィンガープリントの話題です。生態系というさまざまな生物が共存している地球上で、私たちの目には何も変わらないように見えて、実際には温暖化の効果がさまざまな形で現れていることがわかると思います。

池内了『なぜ科学を学ぶのか』より

* 挙動……人のたちいふるまい。動作。

問一 A D に当てはまる最も適することばを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア やはり イ 例えは ウ やがて エ まず

問二 部①「自然が何気なく残した『指紋』を読み取れば、過去の地球環境の変化を探れるだろう、というアイデアです」とありますが、自然が残した「指紋」の読み取りとしてふさわしくないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 300年間の桜の開花の記録を読み取ることで、桜が地球の気温変化にどのように反応しているか調べることができる。

イ 日本列島におけるクマゼミの生息地が北上していることや鳴く時期が早まっていることから、日本の温暖化が進んでいるとわかる。

ウ ツクツクボウシの鳴く時期は日照時間に左右されるため、日が短くなり気温の下がる9月になって鳴き始める様子が観察された。

エ 高山植物の分布を毎年調べることによって、高山植物は自ら育ちやすい環境を求め寒いところに移動する性質を持つことがわかった。

オ 海の魚の分布を30年にわたって調べたところ、地球温暖化によって海水温が上昇しつつあることが判明した。

問三 部②「その土地」とはどのような場所のことでしょうか。文中の言葉を用いて三〇字以内で説明しなさい。

問四 部③「私は、この研究をとっても高く評価しています」とありますが、それはなぜですか。最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 動植物を地道に観察することも、観察したデータの矛盾した部分や欠けている部分を補うことも、並たいていの努力ではできないから。

イ 様々な地域のフィンガープリントの研究を集め歴史を読み解くことによって、地球温暖化が加速している事実を明らかにしたから。

ウ 「桜前線」や「紅葉前線」の毎年の傾向を調べること、次の年の「桜前線」や「紅葉前線」の進み方も予測できるようになったから。

エ ジグザグで一辺倒ではないフィンガープリントのデータを読み取り集約することで、温暖化の影響を推理することができるようになったから。

問五 ④には、ア、エの文章が入ります。文意に合うように並べかえなさい。

ア 何しろ、ヒナは1日に50匹は毛虫を食べるそうですから。

イ あるいは、毛虫が表れるのが早すぎて、鳥のヒナが育つころにはチョウやガになって飛び回っていたら、親鳥もヒナのために必要な餌を集めることができないでしょう。

ウ 植物の若芽が早く育ってしまい、毛虫が動き始める頃にはもはや固い葉っぱになっているとか、逆に植物の新緑が出るのが遅くなると、生まれた毛虫には食べ物がなく死んでしまうでしょう。

エ だから、ヒナが育つところに毛虫がいなくなっていたら、ヒナは餌がなくて餓死してしまうことになります。野生動物が生き残る上では、微妙な時期の調節がなされる必要があるのです。

三 次の1～5は手紙で慣用的に用いられるものです。それぞれ現在の何月のものですか。最も適するものを後から選びなさい。

- 1 暑さ寒さも彼岸までと申しますとおり、涼しくなりました。
- 2 早いもので師走をむかえ、時のはやさにおどろいております。
- 3 初夏の風が心地よく感じられるこの頃です。
- 4 暦の上では春となり、梅だよりも聞こえてきました。
- 5 暦の上では秋となりましたが、厳しい残暑です。

ア 二月 イ 五月 ウ 八月 エ 九月 オ 十二月

四 次の傍線部のカタカナを漢字と送り仮名に直しなさい。

- ① 野球選手が現役をシリゾク。
- ② アツイ鉄板にふれてしまってやけどを負う。
- ③ 深夜にうなされて目がサメル。
- ④ 分別してごみをステル。
- ⑤ 先生の指示にシタガウ。



